別紙４

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目	S-HTP における現代青年の描画特徴の研究 ―新たな描画指標の構築に向けて―
氏　　名	纐纈　千晶

論　文　内　容　の　要　旨

『Synthetic House-Tree-Person Technique（以下，S-HTP と略記）』とは，A4 画用紙 1 枚に「家」，「木」，「人」を課題として，他をどう描くかは対象者の自由に任せる描画テストである。そのため，対象者の現実世界や内的世界が絵に表れやすく，自己像，家族や社会との関係，精神病理などを捉えられる。上（現在は三沢，1995）は，S-HTP の体系化を行い，三沢（2002）は 149 の評定項目を設定し，絵全体のまとまりを示す「統合性」を重視している。S-HTP は，1980 年代は主に医療臨床で使用され，現在は，福祉・司法・教育臨床などでも使用・研究が行われている。しかし，その評定には，いずれも三沢（2002）の項目を用いており，新たな項目の作成を試みた研究はみられない。

現代青年について，「未熟化」，「抑うつ傾向」などの心理的特徴が，多くの研究で述べられている。筆者が，大学生・大学院生を対象として S-HTP を施行した経験からは，遠景や立体描写の減少，スティック・フィギュアの増加などがみられた。さらに，アイテムの塗りつぶし，視点の混在など，かつてはあまりみられなかった表現や，抑うつ傾向を示す特徴が多数出現し，青年の描画は，時代背景とともに大きく変化している。そこで，現代青年の心理的特徴が，どのように描画に表現されるかを捉え，S-HTP の新たな評定項目を作成することを目的として，本研究を行った。

第 1 章　問題と目的

第 1 章では，第 1 節で，S-HTP の詳細，施行方法と利点をまとめ，第 2 節で，研究史を述べた。第 3 節で，現代青年の心理的特徴について，三沢（2008，2012）の S-HTP 研究における「未熟化」と，学生相談研究における「抑うつ傾向の増加」という 2 つの問題点からまとめた。第 4 節で，「未熟化」や「抑うつ傾向」も含んだ何らかの問題を示唆すると考えられる現代青年の描画特徴に言及した。これらは，既存の評定項目では捉えきれないため，独自の S-HTP 項目としてまとめ，新たな描画指標を作成することを目的として述べた。第 5 節では，本論文の構成についての概要をまとめた。

第 2 章　両親の養育態度と青年の描画特徴の関連

第 2 章と第 3 章では，青年の「未熟化」の一要因とされる，幼少期からのコミュニケーション経験とS-HTPの描画特徴の関連を検討した。第2章では，1980年代末から，親の養育能力の低下が指摘されており，成長過程での父親と母親の養育態度に着目した。『Parental Bonding Instrument (PBI)』(Parker et al, 1979)の日本語版を用いて，80 名の対象者の認知する父親，母親それぞれの養育態度から，「愛情と自立承認」，「愛情と過保護」，「冷淡と干渉」，「無関心」の 4 群に分類した。S-HTP の評定は，三沢(2002)の項目を用いた。愛情と自立承認群の「統合性」が高いと仮説を立て，4群間の差をχ^2検定により検討した。父親の養育態度では5項目，母親では2項目において有意差がみられ、無関心群に「非現実的」，「窓の描写なし」の絵が多く，現実社会への関わりが不十分などの結果が得られたが，「統合性」は，冷淡と干渉群に多く，描画特徴から 4 群間の「未熟化」の違いや養育態度との関連を明確に示すには至らなかった。

第 3 章　友人との交流態度と青年の描画特徴の関連

第3章では，友人との交流態度と青年の描画特徴の関連を検討した。103名の対象者の経験に基づく交流態度を捉えるために，「友人とどのようにつきあっているか」，「友人にどんな気持ちを抱いているか」という質問への自由記述を求めた。分類基準を「信頼し，内面を見せられる友人がいるか」として「社交群」，「信頼群」，「距離群」，「希薄群」の4群に分類した。4群間の差をχ^2検定により検討し，11 項目に有意差がみられた。その結果から，社交群は「交流は幅広いが，深い関わりは避ける」，信頼群は「1対1の深い関わりに安定を感じる」，距離群は「近づきすぎない交流を大切にする」，希薄群は「抑圧した衝動の表出が不安で関わりに消極的」という各群の特徴を捉えた。しかし，S-HTPで重視される「統合性」には有意差がみられなかった。これは，現代青年のS-HTPには「付加物の少なさ」，「平面的」など，共通した特徴がみられ，絵の描き方そのものが大きく変化したためと考えられる。従って，現代青年の描画特徴を捉える上で，新たな項目を作成する必要性が示唆された。

第 4 章　『異質表現カテゴリー』の作成

第 4 章では，現代青年の描画に多数出現する「全体，あるいは一部に 1 枚の絵としての不調和・不自然さがみられる特徴」を『異質表現』と定義し，それらを下位項目としてまとめ，S-HTP の新たなカテゴリーを作成するための基礎的研究を行うことを第一の目的とした。また，異質表現には，抑うつを示す特徴もみられたため，抑うつ傾向を弁別する指標として，異質表現カテゴリーの可能性を検討することを第二の目的とした。

異質表現の評定は，筆者と2名の臨床心理学者の協議により，これまでに収集した412名のS-HTPから異質表現と認められる描画特徴を抽出し，最終的に以下の 12 下位項目を設定した。

①多視点・平面と立体など，2 つ以上の視点が混在する。
②地上と地下などを同時に描写。
③空間の偏り・紙面の一部のみを使用。全体を使用しても空白が目立つ。
④人簡略化・家，木．付加物は比較的丁寧に描くが，人物画を記号化。
⑤全体の簡略化・家．木，人すべてを記号化。
⑥強迫的・非常に規則的，詳細な描写。シンメトリーを含む。
⑦過剰な陰影・過度な陰影づけ。または塗りつぶし。
⑧夜・雨の風景・夜や雨の場面を描写。
⑨過大な太陽・他のアイテムにくらべて太陽が過度に大きい。
⑩一部の突出・アイテムが非常に大きく紙面を占める。
⑪アニミズム・非現実的，空想的な描写。擬人化を含む。
⑫不安定な描線・波線や途切れた線での描写。

225 名の対象者には，「日本語版ベック抑うつ質問票・第 2 版(以下，BDI-Ⅱ)」(Beck et al(1996)の原版を，小嶋・古川(2003)が翻訳・標準化)を施行し，抑うつ傾向を測定した。異質表現カテゴリーについて，各項目が示す描画特徴がみられる対象者と，みられない対象者の BDI 得点による t 検定の結果，抑うつ傾向を示す方向に 5 項目で有意差，または有意傾向がみられた。本章では，この 5 項目(③空間の偏り，⑤全体の簡略化，⑥強迫的，⑦過剰な陰影，⑧夜・雨の風景)を抑うつ指標とした。

第 5 章　事例研究

第 5 章では，筆者が大学の学生相談と小学校のスクール・カウンセリングで施行した S-HTP の事例を提示した。学生相談の 9 事例の主訴は概ね抑うつ症状で，BDI-Ⅱでも中等症か重症レベルに該当した。抑うつ傾向を示す異質表現が，全員の絵にがみられ，抑うつ指標としての有用性が示唆された。小学生 7 事例は学校不適応の児童で，保護者のネグレクトも多い。異質表現は全員にみられたが，抑うつ傾向を示す特徴は，自傷行為のある児童と発達障害傾向の児童に多くみられた。

第 6 章　総括的討論

第 6 章では，第 1 章～第 5 章までの研究を概観をまとめて述べ，全体を通しての考察を行った。今後の研究課題として，S-HTP の調査対象者の拡大と異質表現カテゴリーの体系化について述べた。第 4 章において，抑うつ指標した 5 項目について，さらに検討を行う。今後はうつ病，その他の臨床群において S-HTP の実施を行い，それぞれの描画特徴の分析・検討が必要である。また，一般対象者も小・中・高など学校生，社会人まで拡大し，異質表現カテゴリーの標準化を行うことが，S-HTP の有用性を高める意味でも必要であると考えられる。